

明智光秀と「天下」

花園大学文学部日本史学科 専任講師 生駒孝臣

はじめに

○明智光秀のイメージ

- ・ 一般的な光秀像

戦国時代最大の謀反人、保守的な人物⇔革新的な信長

- ・ 同時代人の評価

ルイス・フロイスの光秀評【史料1】

「狡猾」「殿内にあって彼は余所者」「外来の身」「ほとんどすべての者から快く思われていなかった」「裏切りや密会を好み」「刑を科するに残酷」「独裁的」
⇔「戦争においては謀略を得意とし」「計略と謀略の達人」「選り抜かれた戦い^①に熟練の士を使いこなしていた」「築城のことに造形が深く」「優れた建築手腕の持ち主」^②

→①戦争では計略が得意で用兵術に優れており、②築城の名手であった

＝①度重なる信長の敵対者たちとの戦闘や丹波の平定

＝②近江坂本城（大津市）、丹波亀山城（亀岡市）、福知山城（福知山市）

- ・ 見直される光秀像

一般的に想定される信長像に近い人物だった？

- ・ 「天下」概念の見直し

通常…「天下」＝日本全国

→「天下」＝五畿内（山城・大和・摂津・河内・和泉）

- ・ 織田政権における光秀の歴史的立場

「天下」の中心地である京都を信長の代官として長年にわたって支配し、「天下」

＝畿内及び近国の信長軍の司令官としての地位 ⇒織田家中で有能な武将

1.明智光秀の登場

○光秀の出自をめぐって

- ・ 通説の光秀

美濃国守護土岐氏の流れをくむ土岐明智氏。享禄元年（1528）前後の生まれ

弘治2年（1556）の斎藤道三・義龍父子の争いで道三方についたのち浪人

越前の朝倉義景を頼り、長崎称念寺門前（福井県坂井市）に10年ほど居住

→江戸時代に記された『明智軍記』^{あけちぐんき}などによるもの

^{しんびようせい}
⇒信憑性に問題あり

- ・信頼のできる史料にみえる出自の手がかり

①『兼見卿記』元龜3年〈1572〉12月11日条

光秀には美濃に親類がおり、彼らは城普請をするほどの身分

②『左京^{さきょう}亮宗繼入道隆佐^{さき}記』

「美濃国住人ときの随分衆也 明智十兵衛尉」

→光秀は美濃土岐氏もしくは土岐明智氏の比較的よい身分の者

③『多聞院日記』天正10年〈1582〉6月17日条

「細川兵部太夫（大輔）の中間だったのを引き立てられた」

→細川藤孝の中間だったが、後に信長に引き立てられて出世した

※ルイス・フロイスの『日本史』にも同様の記述

④『戒和上昔今禄』一天正5年（1577）に光秀自身が興福寺の僧侶に語った言葉

「我が祖先は忠節を致したゆえ、過分に所領を下され、足利尊氏の御判・御時直書などを所持していたが、当知行ではないゆえ、なかなか信長様へ訴訟もできず、今もって不知行のままである」

→室町幕府の御家人の末裔だという光秀自身の家格意識。祖先は土岐明智氏の傍流の可能性

⇒光秀の出自…美濃土岐氏か土岐明智氏のしかるべき有力者

⇔その傍流か低い身分の者

→土岐氏（または土岐明智氏）一流の家柄だったが、何らかの事情（美濃の内乱力）で没落して亡命・流浪。そのため牢人のような武士の低い身分に

○光秀と妙心寺

- ・本能寺の変後の光秀

本能寺の変後、妙心寺に退却

→宿願達成により自害を考えるも太嶺院慈澤が諫止

妙心寺の使僧が内裏に参じて光秀のために諸国討伐の勅許を要請

→京都市中の税を廃して、祠堂錢を妙心寺に寄附

- ・「明智系図」（『続群書類従』巻第128）にみる妙心寺との関係【系図】

系図の奥書に「于時寛永八辛未六月十有三日 妙心寺塔頭六十五歳」とあり

→系図中にみえる僧玄琳。妙心寺塔頭瑞松院で父光秀の50回忌のために作成
玄琳…^{なんごくぼんけい}南国梵桂。光秀の子といわれる人物。和泉国の妙心寺末寺本徳寺（岸和田市）の開祖にして妙心寺塔頭大心院三英瑞省の弟子

なぜ南国梵桂は妙心寺に？

大心院は細川氏の檀那寺…細川政元の創建。天正年中（1573～92）に細川藤孝の資助により山内へ移転

瑞松院…大心院の徒弟寺。中興開基は光秀の妻の一族である妻木氏

→いずれも光秀に近い人物に関係のある寺院 ⇒三英が梵桂を養育

- ・光秀の十三回忌

文禄3年（1594）6月14日に妙心寺において光秀の十三回忌を挙行

- ・明智風呂

天正15年（1585）に太嶺院住持密宗（光秀の叔父）が光秀の菩提を弔うために建立

※元亀元年（1570）に妙心寺に入寺した美濃出身の南化玄興（1538～1604）の止住の時期

⇒妙心寺は明智光秀と非常に深い繋がり

○光秀の登場

- ・同時代史料での光秀の初見

こうげんいんでんおんだいとうさんしゅうならびにあしがら い げ しゅうおぼえ
「光源院殿御代当参衆 并 足輕以下衆 覚」

永禄10・11年（1567・68）頃に作成。室町幕府に従う幕臣や大名のリスト

足利義昭に仕える側近の「足輕衆」として「明智」の名前 = 光秀

※「御供衆」（「足輕衆」よりも上位の身分）には細川藤孝ほそかわふじたか

足利義昭は永禄9年（1566）9月に越前一乗谷へ下向

→永禄11年4月、一乗谷で義昭が元服した前後に行われた家臣団の整備の際に足輕衆として正式に編入

- ・光秀と義昭との出会い

光秀…朝倉義景に仕えていた？医者をしていた？

永禄9年（1565）8～10月20日の間に、足利義昭方として対三好軍の防御網の一角である、近江国高島郡田中城（滋賀県高島市）に籠城

その際に光秀が『針薬方』を沼田清長に口伝（『針薬方』奥書）＝医者？
しんやくほう

→光秀が越前時代の義昭に仕えていたことは間違いない

○光秀の入京

- ・織田信長との出会い

永禄11年（1568）7月 義昭、藤孝・光秀らと一乗谷から美濃へ下向

→8月 光秀、信長と義昭（・藤孝）との間の連絡を取り次ぎ

同年9月 光秀、信長に奉じられた足利義昭に従い入京

→10月 義昭、本圀寺に居を構え、室町幕府第15代将軍に就任

※11月15日には細川藤孝、連歌師・里村紹巴さとむらじょう はらと連歌会

- ・京都での合戦

永禄12年（1569）正月 三好三人衆の足利義昭御所・本圀寺襲撃

→「明智十兵衛」（光秀）ほか、幕臣・信長家臣（尾張衆・美濃衆・若狭衆）らが防戦（『信長公記』）
しんちょうこうき

⇒これ以後、京都において文書を発給

○京都支配の実務担当者としての光秀

・光秀発給文書の初見

永禄12年（1569）2月 近衛殿御門外・御霊辻子町人中に宛てて、足利義昭とその妻の御座所近辺での寄宿禁止と、とやかく言う者がいれば、その名前を名簿に記して報告せよとの通達【史料2】

※朝山日乗^{あさやまにちじょう}…朝廷とも深い関わりを持つ日蓮宗の僧

村井貞勝^{むらいさだかつ}…信長配下の奉行人。上洛後から京都の支配を担当

→光秀が信長の家臣とともに京都支配に携わったことを示す文書

・木下（羽柴）秀吉との連携

永禄12年4月 山城国賀茂荘に対して年貢と軍役を定める命令【史料3】

・公家関連問題の処理

摂関家一条家と日野家との相論

日乗・光秀が信長の窓口として関与（『言継卿記』永禄12年7月12日条）

→ほかにも貞勝・日乗とともに公家関係の事案を処理

・足利義昭のもとでの活動

義昭による寺社への所領安堵などの「御下知」（命令）を執行／諸勢力から義昭に対する書状の取り次ぎなど

⇒信長配下の奉行として京都に駐留し、また朝山日乗とともに公家に関わる事案処理にあたる一方で、義昭に申し入れられる案件を取り次ぐ役割

～天正3年（1575）までの五年間、村井貞勝とともに京都支配を担当する「両代官」として、行政・訴訟の対応を担当

2.織田信長家臣明智光秀

○京都を中心に戦う光秀

・信長の朝倉攻めへの従軍

元亀元年（1570）5月 光秀、若狭への進軍に対して、足利義昭家臣・曾我助乗に担当業務の引き継ぎを依頼

・反信長同盟への対抗

元亀元年8月～ 摂津での三好三人衆・大坂本願寺の蜂起への対応

浅井・朝倉・比叡山^{うさやま}の拠点近江宇佐山城（大津市）への攻撃

→同年12月 義昭の仲介により浅井・朝倉と和睦。光秀、宇佐山城に入城

・比叡山焼き討ちへの参陣

元亀2年（1571）9月 信長、浅井・朝倉に協力した比叡山の焼き討ちを決行

→光秀…焼打ち後、信長から近江国志賀郡・京都の比叡山領の管理を任され坂本に居城を移転 ⇒信長は光秀の功績を高く評価

- ・足利義昭との対立

元龜2年12月 光秀、比叡山領と号して青蓮院・妙法院・曼殊院門跡領を押領

←正親町天皇問題視。義昭からの譴責
お おぎまち

＝将軍として京都支配を進める義昭との対立

→光秀、義昭近臣曾我助乗に義昭への取りなしを依頼【史料4】

「義昭家臣としての未来像を描けないので、お暇をいただき、頭を丸める

許可をもらえるよう、義昭様にお取り成してください」【史料5】

⇔光秀の京都とその周辺でのトラブル ＝京都周辺地域の支配者の立場

- ・坂本城の築城

元龜3年（1572）閏正月以前から近江坂本城を築城 ～同年12月に落成

→この間、浅井・朝倉、河内の三好義継・松永久秀の敵対に対処

○足利義昭との決別

- ・信長と義昭の対立

元龜4年（1573）2月 義昭、朝倉義景・浅井長政と結び挙兵 →信長に敵対

光秀、義昭に呼応した山城・近江西部の領主たちと激闘

→同年4月 義昭は一旦信長との和議に応じるも再び蜂起

- ・足利義昭の追放

同年7月 義昭、榎島城（宇治市）に籠城。信長、坂本の光秀と合流し包囲

→義昭降伏。河内若江城（東大阪市）へ退去 わかえ ＝室町幕府滅亡

⇒信長軍の部将として京都の義昭方残党を討伐

- ・京都代官としての活動

義昭追放後も、村井貞勝とともに京都支配を担当

光秀の京都での活動拠点…施薬院全宗の屋敷など や く いんぜんそう 【図1】

～京都代官の立場は天正3年（1575）頃まで。それ以降、任務を離れる

- ・多忙な日々

天正元年（1573）12月～天正2年11月まで各地を転戦【図2】

正月：大和→2月：美濃→坂本→7月：山城→7～9月：摂津・河内→大和

→11月：坂本 ＝信長からの絶大な信頼

3.本能寺への道のり

○丹波計略の開始

- ・長篠合戦への従軍

天正3年（1575）5月 光秀、長篠合戦に従軍 →織田軍、武田勝頼軍に大勝

- ・丹波攻めの総司令官

天正3年6月 信長、丹波で反抗する宇津頼重・内藤如安の討伐を企図。光秀の

派遣を決定 ※7月 日向守に任じられ、惟任 これとう の名字を与えられる

→7～8月 丹波勢力と戦闘。この間、越前一向一揆攻めに参加

10月 再び丹波へ

○丹波平定までの道のり

・敵対者たちとの戦い【図3】

内藤如安（八木城）…天正5年（1577）落城／宇津頼重（宇津城）…天正7年7月
落城／丹後一色氏（建部山^{たけべやまじょう}城）…天正7年落城／荻野（赤井）直正（黒井城）
…天正7年8月落城／波多野秀治（八上城）…天正6年9月包囲～7年6月落城

→天正7年10月24日 光秀、安土へ参り丹波・丹後の平定を信長に報告

「維任日向守、丹後・丹波両国一篇に申付け、安土へ参り御礼」
(惟)

（『信長公記』巻12 天正7年条）

⇒丹波攻め開始から足かけ4年にわたって平定

※その間、大坂本願寺攻めと罹病、荒木村重（村重の息子は光秀の婿）の謀
反への対応、播磨侵攻中の羽柴秀吉の援軍等に從事

・丹波国内諸城の構築

亀山城…天正4年（1576）頃から築城開始～天正9年（1581）4月頃まで工事継続
→丹波経営の拠点

福知山城…天正7年（1579）8月 波多野方国人塩見氏の横山城を改修

→明智秀満（光秀の娘婿）が城代

⇒天正8年2～9月にかけて丹波国内の支配

○信長主催のセレモニーの責任者

・天正9年（1581）正月15日の安土城での爆竹の責任者

・京都馬揃えの運営

京都で信長が収集した騎馬を披露するパレード。公家・武家の要人が参集

光秀、正月23日に責任者に任じられ準備 →2月28日に举行 ⇒大成功

○運命の天正10年

・甲斐武田攻めへの参加

2月 信長、光秀に武田勝頼攻めへの参陣を命令

→3月 大軍を率いて参陣。武田家滅亡

・徳川家康の接待役

5月 信長、光秀に安土城へ武田攻め後の挨拶にきた徳川家康の接待を命令

→15～17日 光秀、珍品をとりそろえるなど盛大なもてなし【史料6】

・中国への出兵

5月17日 信長、備中高松城で毛利勢と対峙する秀吉軍の加勢を命令

26日 坂本→亀山。27日 亀山→愛宕山…「二度三度迄鬪を取り」【史料7】

28日 里村紹巴らと連歌…「ときは今あめが下知る五月哉」→亀山へ帰城

- ・本能寺の変

5月29日 信長、小姓衆ら2,30人を引き連れ、安土を出発して上洛

6月 1日 信長、本能寺で公家衆らの訪問に対応。光秀は謀反を決意【史料8】

2日 光秀、本能寺の信長と二条御所の織田信忠を襲撃。村井貞勝も死去

- ・公家の対応

吉田兼見、誠仁親王（正親町天皇皇子）の「御使」として6日に光秀のもとへ
→「京都の儀、別儀なきのようかたく申し付くべきの旨」を伝達（『兼見卿記』）
＝「京都の儀」をゆだねる意向

- ・光秀の最期

6月13日 山崎の戦いで織田信孝・羽柴秀吉軍に敗れる

～15日 醍醐のあたりで討ち取られる

⇒京都を中心に活躍した光秀はその最期も京都でむかえた

おわりに

○本能寺の変をめぐる

- ・信長へのうらみか？天下取りの野望か？黒幕がいたのか？

光秀の動機について語る史料は後世の創作

四国の長宗我部元親ちようそ か べもとちかをめぐる問題

足利義昭？朝廷？イエズス会？秀吉？家康？

- ・千載一遇のチャンス

光秀の立場…信長軍における京都一帯の軍事総司令官

⇔秀吉の救援に向かう信長は少数の手勢＝光秀の軍勢に依存

→京都には信長とその嫡男信忠の二人が同時に存在

○光秀の実像

- ・京都・「天下」の支配

公家（朝廷）・寺社との折衝 →高度な交渉能力・調停能力が必要

- ・武将としての活動

信長の戦争において各地の戦場に派遣

→軍事力の高さとの確かな用兵術 cf. 本能寺の変の成功

[主要参考文献]

浅利尚民・内池英樹編『石谷家文書 将軍側近のみた戦国乱世』吉川弘文館、2015年

金子 拓『信長家臣明智光秀』平凡社新書、2019年

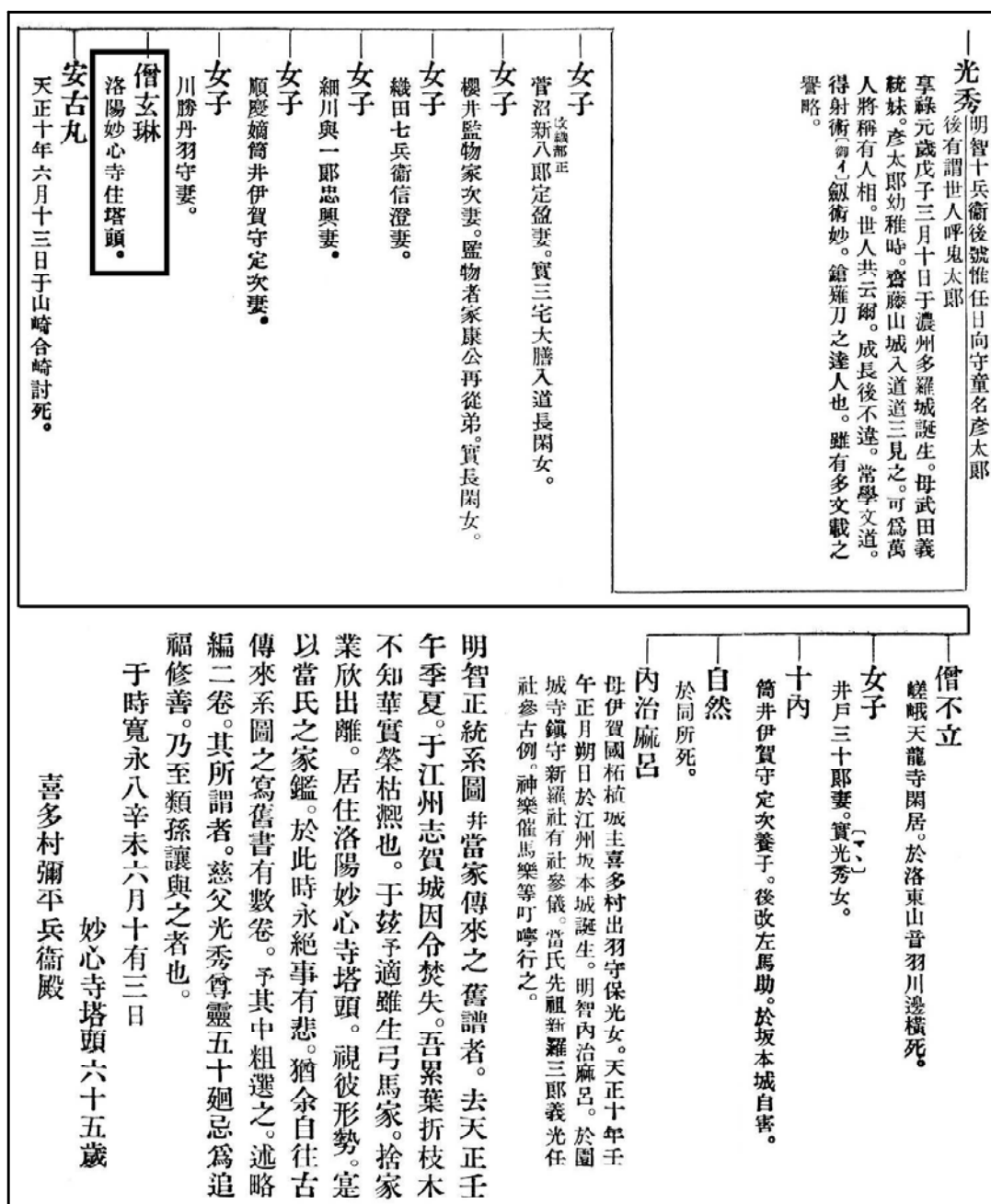
川上狐山『増補 妙心寺史』思文閣出版、1975年

河内将芳『宿所の変遷からみる信長と京都』淡交社、2018年

桐野作人『明智光秀と斎藤利三』宝島社新書、2020年

柴 裕之『図説 明智光秀』戎光祥出版、2019年
 柴 裕之編著『織豊大名の研究8 明智光秀』戎光祥出版、2019年
 高柳光寿『明智光秀』吉川弘文館、1958年
 谷口克広『検証 本能寺の変』吉川弘文館、2007年
 早島大祐『明智光秀 牢人医師はなぜ謀反人となったか』NHK 出版新書、2019年
 藤田達生『証言 本能寺の変 史料で詠む戦国史①』八木書店、2010年
 藤田達生・福島克彦編『明智光秀 史料で詠む戦国史③』八木書店、2015年
 藤田達生『本能寺の変』講談社学術文庫、2019年（初出2003年）
 渡邊大門『明智光秀と本能寺の変』ちくま新書、2019年
 洋泉社編集部編『ここまでわかった 本能寺の変と明智光秀』洋泉社、2016年

【系図】「明智系図」抄出（『統群書類従』巻第二百二十八）



第五十六章（第二部四一章）¹

明智が謀叛により、信長、ならびに後継者の息子を殺害し、天下に叛起した次第

信長の宮廷に惟任日向守殿、別名十兵衛明智殿と称する人物がいた。彼はもとより高貴の出ではなく、信長の治世の初期には、公方様の邸の一貴人兵部太輔と称する人に奉仕していたのであるが、その才略、深慮、狡猾さにより、信長の寵愛を受けることとなり、主君とその恩恵を利ずることをわきまえていた。殿内にあつて彼は余所者であり、外来の身であつたので、ほとんどすべての者から快く思われていなかったが、自らが（受けている）寵愛を保持し増大するための不思議な器用さを身に備えていた。彼は裏切りや密会を好み、刑を科するに残酷で、独裁的でもあつたが、己れを偽装するのに抜け目がなく、戦争においては謀略を得意とし、忍耐力に富み、計略と策謀の達人であつた。また、築城のことに造詣が深く、優れた建築手腕の持主で、選り抜かれた戦いに熟練の士を使いこなしていた。彼は誰にも増して、絶えず信長に贈与することを怠らず、その親愛の情を得るためには、いささかもこれに逆らうことがないよう心掛け、彼の働きぶりに同情する信長の前や、一部の者がその奉仕に不熱心であるのを目撃して、自らは（そうではないと装う）必要がある場合などは涙を流し、それは本心からの涙に見えるほどであつた。また、友人たちの間にあつては、彼は人を欺くために七十二の方法を深く体得し、かつ学習したと吹聴していたが、ついには、このような術策と表面だけの繕いにより、あまり謀略（という手段を弄すること）に精通してはいない信長を完全に瞞着し、惑わしてしまい、信長は彼を丹波、丹後二カ国の国主に取り立て、（信長）がすでに破壊した比叡山の大学（延暦寺）の全収入——それは（別の）国の半ば以上の収入に相当した——とともに彼に与えるに至つた。そして明智は、都から四里ほど離れ、比叡山に近く、近江国の二十五里もあるかの太湖（琵琶湖）のほとりにある坂本と呼ばれる地に邸宅と城塞を築いたが、それは日本人にとって豪壮華麗なもので、信長が安土山に建てたものにつき、この明智の城ほど有名なものは天下にないほどであつた。ところで信長は奇妙なばかりに親しく彼を用いたが、このたびは、その権力と地位をいっそう誇示すべく、三河の国主（徳川家康）と、甲斐国の主将たちのために饗宴を催すことに決め、その盛大な招宴の接待役を彼に下命した。

【史料2】

朝山日乗・村井貞勝・明智光秀連署状

(陽明文庫所蔵) ○折紙

公方様・御台様 御座所近辺寄宿停止之旨、被仰出候、万一菟角之族申仁於在之者、記按名急度可有注進候、為其如此候也、

(木暮十二年) 二月廿九日

明智十兵衛尉
光秀(花押)
村井民部少輔
貞勝(花押)
日乗上人
朝山(花押)

(前々) 近衛殿御門外

(御) 同五雲図師

(山城守) 町人中

【史料3】

明智光秀・木下秀吉連署状

(澤文書・山城) ○モト折紙

猶以定納四百石宛ニ相定候也、以上、

(山城相衆部) 城州賀茂庄之内、自先々落来候田畠、雖為少分、任

御下知旨、賀茂売買之外にて毎年四百石宛可運上、并軍役百人宛可有陣詰之由、得其意候、聊不可有如在事肝要候、恐々謹言、

(永祿十二年) 四月十四日

木下藤吉郎
秀吉(花押)
明智十兵衛尉
光秀(花押)

賀茂庄中

【史料4】

明智光秀書状

(国立公文書館所蔵「古簡雜纂」一二)

下京壺底分地子錢、兩季ニ式拾壹貫貳百文、為合力進之候、公儀御取成以下頼入候付而、如此候、別而御馳走肝要候、恐々謹言、

明智十兵衛尉

元龜二十二月廿日

光秀(花押)

(助衆) 曾我兵庫頭殿

御宿所

【史料5】

明智光秀書状

(MOA美術館所蔵)

みくるしく候て憚入存候、御志計候、

昨今ハ懸御目、快然此事候、就其我等進退之儀、御暇申上候処、種々御懇志之儀共過分忝存候、とニかくニゆくすへ難成身上之事候間、直ニ御暇を被下、かしらをもこそけ候様ニ御取成頼入存候、次此くら作にて候由候て、可然かたより給置候間進入候、御乗習ニ御用ニたてられ候ハ、畏入存候、かしく、

(切封ウハ書)

(明智十兵衛尉) 明十兵

(曾我兵庫頭助衆) 曾兵公

人々御中

光秀

【史料6】『信長公記』卷十五(奥野高広・岩沢愿彦校注

『信長公記』角川書店、一九六九年。以下同)

五月十四日、江州の内ばんば迄、家康公・穴山梅雪御出でなり。惟住五郎左衛門、ばんばに仮殿を立置き、雑掌を構へ、一宿振舞申さる。同日に三位中将信忠卿御上洛なされ、ばんばへ御立寄り、暫時御休息の処、惟住五郎左衛門、一献進上候なり。其日、安土まで御通り候キ。

五月十五日、家康公、ばんばを御立ちなされ、安土に至つて御参着。御宿大宝坊然るべきの由上意にて、御振舞の事、維任日向守に仰付けられ、京都・堺にて珍物を調べ、生便敷結構にて、十五日より十七日迄三日の御事なり。

【史料7】『信長公記』卷十五

(同) 五月廿六日、維任日向守、中国へ出陣として坂本を打立ち、丹波亀山の居城に至つて参着。次日、廿七日に亀山より愛宕山へ仏詣、一宿参籠致し、維任日向守持御座候哉、神前へ参り、太郎坊の御前にて二度三度迄鬘を取りたる由申候。廿八日、西坊にて連歌興行、発句 維任日向守、

ときは今あめが下知る五月哉 光秀
水上まさる庭のまつ山 西坊
花落つる流れの末を閑とめて 紹巴

か様に百韻仕り、神前に籠置き、

【史料8】『信長公記』卷十五

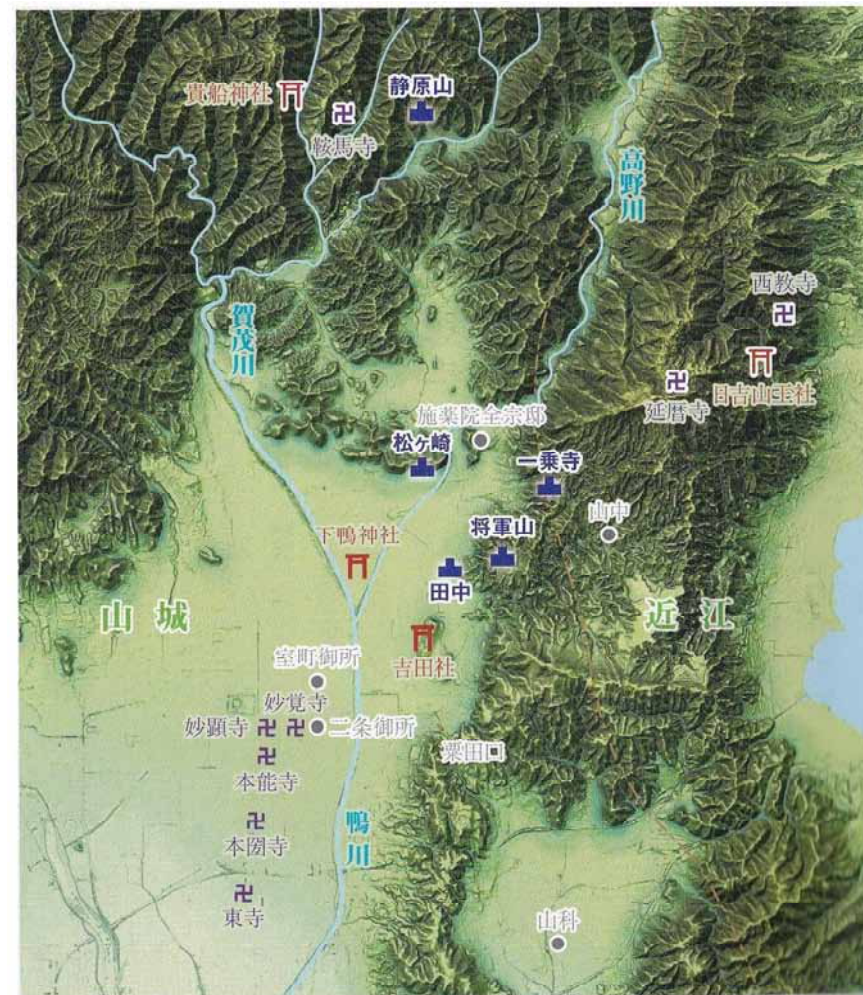
(同) 去程に不慮の題目出来して、

六月朔日夜に入り、丹波国亀山にて維任日向守光秀逆心を企て、明智左馬助・明智次右衛門・藤田伝五・斎藤内蔵佐、是等として談合を相究め、信長を討果し、天下の主となるべき調儀を究め、亀山より中国へは三草越えを仕候。爰を引返し、東向きに馬の首を並べ、老の山へ上り、山崎より摂津国地を出勢すべきの旨、諸卒に申触れ、談合の者共に先手を申し付け、六月朔日夜に入り、老の山へ上り、右へ行く道は山崎天神馬場、摂津国皆道なり。左へ下れば京へ出る道なり。爰を左へ下り、桂川打越し、漸く夜も明方にまかりなり候。



天正2年の光秀の動き 地形は現在の地形。以下同じ

【図2】



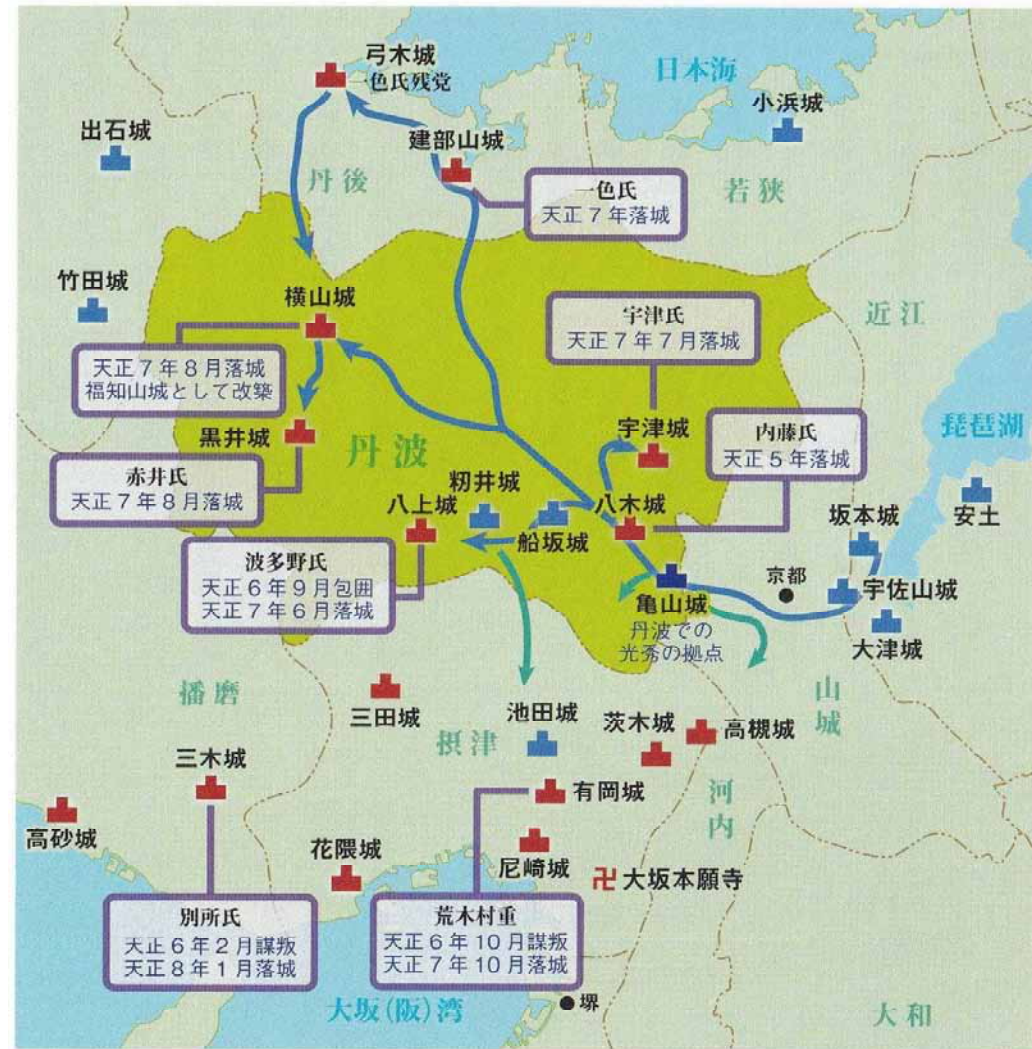
戦国時代の京都周辺地図

【図1】（柴裕之『図説 明智光秀』より。以下同）



畿内周辺の光秀伝承地図

【図4】



光秀の丹波攻略の流れ

【図3】